

近代ボヘミアにおけるネイションと民俗

桐 生 裕 子

はじめに

本稿の課題は、ハプスブルク君主国下のボヘミアにおけるネイションと農村住民との関係を、民俗文化に注目しつつ検討することにある。

ボヘミアのネイションをめぐる歴史叙述は、長く「民族再生 (národní obrození)」論に規定されてきた¹。この歴史解釈は、三十年戦争中のビーラー・ホラの戦い (1620 年) 後の時代を、ハプスブルク家によって過酷なドイツ化が推し進められた「暗黒の時代」ととらえる。その上で、近代におけるチェコ・ネイションの興隆を、「暗黒の時代」に農村民衆の間で細々と保存されたチェコ語・チェコ文化が他の社会集団にも普及して復興され、農村民衆を核としながら「チェコ民族」が「再生」してゆくプロセスとして理解するのである。

しかし、近年ではネイションの原初論的把握に基づく「民族再生」論は批判され、近代のネイションを構築されたものとしてとらえるアプローチが主流となりつつある。新たなアプローチによる研究の進展に大きく寄与したのが、1960年代から活動を開始したフロホである。フロホは、近代のネイションはネイション形成運動によって創出されたと指摘し、ネイション形成を三つの段階からとらえる「三段階テーゼ」を打ち出した。このテーゼによれば、近代のネイションは、①知識人たちの狭いサークルの間で言語・歴史・民俗文化の研究や、文芸的創作活動が進められる段階 (A 段階)、②A 段階の成果が狭い知識人のサークルを超えて流通する段階 (B 段階)、③政治的要求を伴った大衆的な運動が展開される段階 (C 段階)、という三つの段階を経て形成される。そしてフロホは、近代ネイションの形成過程を解明するべく、ネイション形成運動初期の担い手の階層・社会的出自・居住地・教育水準等を、チェコを含めたヨーロッパの小ネイション (kleine Nation) を対象に広く比較検討したのである²。

フロホの研究は、近代におけるチェコ・ネイションの興隆が、農村民衆を中心に「チェコ民族」が「再生」してゆくプロセスなどではなく、聖職者や学生をはじめとする都市出身の知識人が担い手となって、チェコ・ネイションという新たな文化的・政治的主体を構築してゆく過程であることを明確に指摘した点で画期的であり、その後の研

究に影響を与えることになった³。

フロホの研究を重要な契機として、ボヘミアのネイションにかんする研究は大きく進展することになったが、今後検討されるべき課題も多い。そのひとつと考えられるのが、ネイションと農村の関係である。フロホの研究以降、ネイションをめぐる動きが都市を中心に生じたという認識が広まるなかで、ネイションにかんする新たな研究は主に都市を対象として進められることになり、農村についてはほとんど研究が行われてこなかった。しかし、ネイションをめぐる動きが都市を中心に生じたということは、農村がネイションと無関係であったことを意味しない。1899年に農村住民を中心に設立された「チェコ農業党 (Česká strana agrární)」が、農村住民の要求と並びチェコ・ネイションの利益の貫徹を目標に掲げていたことから、農村がネイションをめぐる動きと無関係ではなかったことは明らかであろう。同時に、「民族再生」論において、農村住民が「民族の核」ととらえられてきたことを考えるならば、「民族再生」論を乗り越えてゆく上で、当該期の農村住民がネイションの問題に実際にいかにかかわったか、新たな視点を交えて明らかにしてゆく作業は不可欠である。

以上の問題意識から、筆者はこれまで19世紀におけるボヘミアのネイションと農村住民との関係について考察を進めてきた⁴。本シンポジウムでは「近現代ヨーロッパ農村の習俗と政治」というテーマが設定されており、また近代ネイションの形成にあたって、民俗文化が重要な役割を果たしたことが指摘されていることから⁵、この論考では、ボヘミアにおけるネイションと農村住民との関係を、特に民俗文化に注目しつつ検討してゆくことにしたい⁶。

1. ネイション概念の変遷と農村住民

ネイションと農村住民との関係を検討するにあたって、まずはボヘミアにおけるネイション (národ) 概念の歴史の変遷と、この概念と農村住民とのかかわりを整理しておきたい⁷。

ボヘミアにおけるネイション概念の歴史の変遷を考える際には、まずクトナルの研究が参照されなければならない⁸。クトナルの研究によれば、ネイションの語が表す内容は時代・論者によって多様であり、その内容は直線的で明確な発展過程をたどったわけではない。しかし、近代以前には言語中心的なとらえ方は一般的ではなく、むしろ身分制の国制の下で特権を享受する社団を指すなど、歴史的には階層限定的で、身分制秩序と結びついた概念であったと考えることができる。

このようなネイション概念は、18世紀後半以降、「愛国者 (vlastenci)」の活動やドイツ・ロマン主義思想の影響を受けるなかで、大きな変化を遂げることになった。

マリア・テレジアやヨーゼフ2世によって国家改革が進められた1770年代頃から、ボヘミアには祖国（vlast）とその言語、およびその過去を愛することに価値を見いだす、「愛国者」と呼ばれる人々が現れはじめた⁹。そして、平民的出自の文人や学者を中核とする愛国者たちは、啓蒙思想の影響のもと、批判的に認識された真実に基づく学問こそが祖国の繁栄に資するとして、祖国の歴史や、祖国の言語であるチェコ語の学問的な研究を開始した。愛国者の活動は当初学問・文芸の領域で行われたが、次第に彼らの間から祖国の繁栄には民衆も資するべきとして、民衆の啓蒙活動に従事するものが現れ始め、非特権階層である民衆も祖国の重要な構成員であるとなさされるようになっていった。さらに祖国を中心に展開されていた愛国者たちの議論において、次第にネイションに言及されることが増えるとともに、祖国、言語、ネイションの結びつきが強調されはじめた。こうして1770年代以降、愛国者の活動が展開されるなかで、従来階層限定的概念であったネイションは、祖国概念を媒介としながら下方拡大、つまり農村住民を中心とする非特権階層をも含む概念へと再編成されてゆくことになったのである。

さらに19世紀に入ると、ボヘミアにおけるネイションをめぐる議論は、ヘルダー（J. G. Herder）をはじめとするドイツ・ロマン主義思想の影響を受け、ネイションを形成するものとしての文化、とりわけチェコ語の重要性が強調されるようになった。同時に、農村と農村住民はチェコ語やチェコ文化の担い手として論じられ、ネイションの核とみなされるようになってゆくのである。

以上のように18世紀後半以降、ボヘミアにおけるネイション概念は変化し、農村住民を中心とする非特権階層を含む概念へと再編されていった。その過程で農村住民への視線も変化し、18世紀には「領邦臣民のなかで最も地位が低い」とみなされていた農村住民が、次第にチェコ・ネイションの核ととらえられるようになっていったのである¹⁰。

こうして農村住民への視線が変化し、また愛国者を中心に、近代における新たな文化的・政治的主体としてチェコ・ネイションを構築する努力が試みられるなかで、1820年代以降、文人チュラコフスキー（F. L. Čelakoský）や、文芸をはじめさまざまな領域で活躍したエルベン（K. J. Erben）をはじめとするプラハの文人や学者、さらに各地の聖職者、教師、官吏などによって、農村民衆の民謡、民話、慣習、ダンス、衣装などの収集が進められた。そして、農村民衆のダンスを基にしたダンスが、「チェコ・ダンス」として都市民に受け入れられていくなど、農村民衆の文化をひとつの重要な素材としながら、近代チェコ・ネイションの文化の形成が進められることになったのである¹¹。

但し、このことは農村民衆の文化が、そのままチェコ・ネイションの文化になったことを意味するわけではない。むしろネイションをめぐる動きのなかで、農村民衆の文化は大きく変化することになる。それではどのように農村民衆の文化は変化することになったのか。その過程を明らかにするためにも、次章では、1830年代以降、19世紀を通じてチェコ・ネイションをめぐる動きをリードすることになるチェコ・リベラル派のネイション構想と農村住民との関係について、検討してみたい。

2. チェコ・リベラル派と農村住民

①チェコ・リベラル派のネイション構想

1830年代末頃から、先行する時代のネイションをめぐる議論を背景としながら、自由主義思想の影響を強く受けたチェコ・リベラル派と呼ばれる人々が現われはじめた。

従来の愛国者の中心が文人、学者、聖職者であったのに対し、チェコ・リベラル派の指導者となったのは、主に平民的出自の法律的教育を受けた若い世代の知識人であった。彼らの最大の特徴は、文化的活動にとどまらず、政治へ強い関心を持っていた点にあった。そして、政治の領域において「ネイションの権利」を貫徹しようとする彼らは、ネイションを自由で平等な市民から構成されるものとして構想した上で、こうしたネイションを基盤とするハプスブルク君主国の政治的再編——具体的には立憲制と連邦制の導入——を目指したのである¹²。

チェコ・リベラル派の議論においても、ロマン主義の影響を受けつつ、ネイションを形成するものとしてのチェコ語は重視されていた。しかし、とりわけネイションが自由で平等な市民から構成されることが強調された理由としては、大きく二つ考えられる。

ひとつには、ネイションを自由で平等な市民から構成されるものととらえ直し、ネイションを基盤とする政治制度をハプスブルク君主国に導入することで、従来の身分制秩序のもとで非特権階層に認められてこなかった諸権利の獲得、とりわけ政治的権利の拡大を目指したと考えられる。

ふたつには、チェコ・ネイションの文明性・進歩性を強調することで、ドイツ・ナショナリズムと対抗しつつ、チェコ・ネイションの要求の実現を目指したと考えられる。19世紀のネイション観、あるいは自由主義的ネイション観によれば、全てのネイションが政治的権利を貫徹できるわけではなく、文明性を備え、進歩に適したネイションのみがその権利を行使することが可能とされた。そして、当時ドイツ・ナショナリズムの主要な推進者であったドイツ・リベラル派は、自由・平等・進歩といった諸価値はドイツ文化に体现されるとして、ドイツ・ネイションの文明性・進歩性を主張し

ながら、中央ヨーロッパあるいはハプスブルク君主国において支配的地位を確保し、ドイツ・ネイションを中心とする国家制度を確立することを目指した¹³。このような状況において、ドイツ・リベラル派と対抗しつつ、チェコ・ネイションの政治的権利を貫徹するためにも、チェコ・リベラル派は、チェコ・ネイションが自由で平等な市民から構成され、文明性・進歩性を備えたものであることを強調する必要があったと考えられる。

そして、チェコ・リベラル派がネイションを自由で平等な市民から構成されるものとして構想したことは、彼らの農村住民に対する姿勢にも反映することになったのである。

②チェコ・リベラル派と農村住民

チェコ・リベラル派が政治の表舞台に本格的に現れるのは、1848年革命期である。彼らもロマン主義の影響を受け、農民をネイションの核となる重要な社会層ととらえており、革命当初から農村住民の問題に積極的に取り組んでいった。

当時ボヘミアの農村住民は隷農制の下にあったが、自由主義を支持し、平等な市民から成るネイションを構想するチェコ・リベラル派の人々は、隷農制の廃止を重要な課題とみなし、革命当初からその実現に向けて積極的に活動を進めた。

しかし同時に、チェコ・リベラル派の人々は、隷農制の廃止によって農村住民の問題がすべて解決され、彼らの構想する平等な市民から成るネイションが即座に創出されるとも考えてはいなかった。というのも、『ネイション新聞 (Národní noviny)』¹⁴に掲載されたヘンズルの論考が述べるように、隷農制から解放され、新たに自由な市民となる農村住民には、「聖なるネイションの権利、祖国の繁栄をまもる義務」が生じるのであった。そして、その義務を果たすためにも教育、特に「ネイションの活動、ネイションの現在の鏡」である新聞を読み、今や隷農制から解放された農民が主体となって関与することになった、世の中の動きについて「自ら学び、見解を持つ」ことが必要となるのである¹⁵。

ネイションは教育を必要とするという主張は、『ネイション新聞』の編集主幹ハヴリー・チェクの論説にも頻繁に現われた。「ネイションの全ての階級における全般的な教育こそ、真の市民的精神 (občanský mysl)、ナショナルな思考 (národní smýšlení)、自由な思考というわれわれの目的に達する、最も主要な手段である」¹⁶。「農民身分は、我々の領邦の最も多くの部分を所有しているが、時とともに我々の祖国において最も重要な身分となるだろう。そして、議会では彼らの意志に沿って、我々の自由な祖国にかんする事柄が決定されるようになるだろう。だからこそ全ての人々は、農民身分

が教育においても、立憲生活においても、他の身分に並び、遅れたままにならないように努力をしなければならないのである」¹⁷。

つまりチェコ・リベラル派の人々によれば、自由な市民となることは義務を伴うのであった。そして、農村住民が自由で平等な市民としてネイションの構成員となり、その義務を果たすためには、身分的解放だけでは不十分であり、「市民的精神」「ナショナルな思考」を身に付けるためにも、雑誌、結社、自治活動などを通じた教育が不可欠であると考えられたのである¹⁸。

このようなチェコ・リベラル派の姿勢を象徴的に示すのが、1848年革命期に農村で頻発した騒擾に対する彼らの反応である。ボヘミアにおいては、三十年戦争以降、領主による隷農支配が強化される傾向にあったが、農村住民は単に受動的な存在であったわけではなく、しばしば請願、貨幣・現物税の支払いや賦役の拒否、場合によっては蜂起といった手段によって、異議申し立てを行った¹⁹。1848年革命時にも、賦役や領主による土地横領などに対する不満から、農村で騒擾が頻発したが、チェコ・リベラル派は「権利を得たいと望む民衆は、不正によってそれを得ないし、他人の権利を侵害しない」として騒擾、つまり農村住民の慣習に基づく意思表示を批判した²⁰。チェコ・リベラル派は隷農制の廃止を要求し、また農村住民の政治への関与を求めたが、それはあくまで立憲制・議会制を基盤にした政治への、教育を受けた市民・ネイションとしての参加であり、農村の慣習に基づく異議申し立てや意思表示を求めたわけではなかったのである。

以上の事例が示すように、チェコ・リベラル派の人々もロマン主義の影響を受け、農村住民をネイションの核とみなしたが、だからといって農村住民がそのままネイションの構成員になり得るわけでも、農村住民の文化がそのままチェコ・ネイションの文化となり得るわけではなかった。チェコ・リベラル派が求めたのは、あくまで立憲制に基づく新たなハプスブルク君主国において、国家意志の担い手となることのできるネイションであった。それはつまり、知的にも経済的にも自立し、政治を担うことができる「自立した能動的市民（samostatný činný občan）」から成るネイションであり、そのために教育が新たなネイションを実現する要件としてとらえられることになったのである²¹。

3. 19世紀後半のネイションと農村住民

ボヘミアにおいては、1848年革命の成果のひとつとして隷農制が廃止され、19世紀後半に入ると、農村においてもネイションをめぐる動きが活発に展開されることになる。そして、当時ネイションをめぐる動きをリードしたチェコ・リベラル派が、自由

で平等な市民から成るネイションを構想し、教育を重視したことから、農村における活動も啓蒙活動に重点を置いて進められることになった²²。

その中心となったのが出版活動と結社活動であり、『農事新聞 (*Hospodářské noviny*)』をはじめとする農村住民向けの各種定期刊行物や書籍が刊行されるとともに、農業協会、農業・読書サークル、前貸し金庫 (*záložny*)、製糖株式会社などさまざまな結社の設立が進められた²³。

隷農制から解放された農村住民を「能動的市民」、「進歩的営農家」へと育成することを課題とするこれらの活動においては、第一に農法および農業経営を改良することが重要な目標とされた。ここで目指されたのは、自由な農民にふさわしい「理性」・「科学」・「熟慮」に基づく「進歩的」農業であった。これと対比的に、従来の隷農制下の農業は「古い慣習」・「迷信」・「偏見」に基づくものとしてとらえられた。そして、隷農制が廃止されても従来の農法を継続することは、精神的な隷属状態に自らとどまることを意味するとして、その克服が強く求められたのである。

同時に、この時代の啓蒙活動においては読書と議論の習慣を身に付けることも重視され、特に農業協会や農業・読書サークルをはじめとする結社では、読書と議論が活動の軸となった。読書と議論が重視されたのは、ひとつには「進歩的」農業を推進する上で必要な知識や経験を獲得し、相互に交換し、普及させるための重要な手段とみなされたからである。しかし、それだけにとどまらず、結社で読書を通じて世のなかの出来事について学び、さらに議論を通じて自分の見解や意見を公に表明する技術を身に付けることは、農村住民が市民として公的生活に関与してゆく上で必須と考えられたのである。

こうして19世紀後半に農村で展開された啓蒙活動は、農法の改善が従来の農法の強い否定の上に進められたことが象徴するように、隷農制時代から継続する農村住民の慣習や振る舞いの変革を強く推し進めようとするものであったといえることができる。

一般に、特定の集団によって生み出されつつも、普遍的・合理的と称して押しつけられる規範に対しては、拒絶、積極的な利用、読み替えといった反応があるといわれる²⁴。ボヘミア農村で展開された啓蒙活動の場合には、市場向け生産を拡大しつつあった肥沃な中央ボヘミア・東ボヘミアの富裕な農民を中心に、積極的に読書をし、結社活動に参加する人々が見られた。そして、農業を専門的に扱う結社は、1848年革命以前にはひとつしか存在しなかったといわれるが、1910年には農業結社の数は3800に達した²⁵。またチェコ語の農業雑誌の数も1850年には1誌であったのが、1895年には57誌まで増加するなど、19世紀後半を通じてボヘミア農村に結社活動と出版物が普及することになったのである²⁶。

上述したように、出版活動と結社活動を中心に進められた19世紀後半の農村における啓蒙活動は、農村住民の広義の文化の変革を目指すものであったといえる。そして、次に引用する農民の回想録は、実際に結社活動を通じて農村住民の生活が変化しつつある様子を示している。「この時代に（1880年から1900年の間に一引用者）、村落にはベセダと呼ばれる読書協会が設立され、市民（občané）の半分、あるいはそれ以上の人々が加入した。（略）これらは名ばかりの結社ではなく、毎日数名の農民が集まり、日曜や祝日には全ての営農家、さらに跡継ぎ息子たちが親しい語らいのために集った。そして、1880年以降、紡ぎ糸は消えてゆき、糸車に替わって本が夜の集いにも徐々に現れるようになったのである」²⁷。

つまり農村におけるネーション化（nationalization）の過程は民俗文化、つまり農村住民が慣習的に保持してきた文化の変容を伴いつつ進展したといえるだろう。上述したダンスの事例が示すように、農村民衆の文化は、確かに近代チェコ・ネーションの文化が創造される際に重要な材料を提供し、この時代、都市では農村の民衆文化を素材としたナショナルなシンボルが盛んに利用され、例えば衣装が着用されたり、歌が歌われたりしたと伝えられている。しかし、逆に農村においては従来の衣装は隷農の象徴として忌避され、また歌を歌うことも少なくなったといわれるように、農村住民の文化がそのままチェコ・ネーションの文化となり得たわけではなく、彼らがネーションの構成員となるには、一定の規範を身に付けることが必要だったのである²⁸。

しかし、このことは農村住民が要請される規範をただ受け入れ、受動的存在としてネーションに「統合」されたことを意味しない。1870年代末以降、ボヘミアでは農業不況を背景に、農業運動が展開され、農村住民がより積極的な政治参加を求めるようになる。この過程で農村住民とネーションの関係も変化し、農村住民の文化が持つ意味も変わってゆくことになるのである。以下、その過程を検討してみたい。

4. 世紀転換期のネーションと農村住民

ボヘミア農業は、1870年代末から穀物価格の低下、さらに1884年以降テンサイ価格の急落に見舞われ、厳しい不況に苦しむことになった²⁹。農業不況が深刻化してゆくなかで、農村住民は農業や彼らの利益が十分守られていないという不満を募らせ、従来の行政・政治制度への批判を強めていった。なかでも彼らの強い批判の対象となったのが、「ネーションの代表」を標榜して政治を主導してきたチェコ・リベラル派であった。農村住民による批判の背景には、チェコ・リベラル派が「ネーションの代表」を標榜しつつも、実際には都市出身者、特に法律家をはじめとする教養市民が主導権を握り、国制問題を最優先事項として議会政治を運営していたことがあった³⁰。農業利

益の擁護を求める農村住民は、農民議員の増加や農業利益を代表する組織の設立を強く要求した。しかし、チェコ・リベラル派の指導者は、「ネイションの統一」の重要性を強調しながらヘゲモニーの保持を目指し、ネイションよりも農業の利益を優先する農村住民の「教育の不足」とさらなる教育の必要性を指摘して、農村住民の要求に応じようとはしなかった。

当初農村住民は、自らが市民でありネイションの平等な構成員であることを根拠に、実際の政治運営に彼らの要求が平等に反映されることを求めていった。しかし、要求がチェコ・リベラル派によって受け入れられず、彼らと政治的影響力をめぐって交渉・抗争を展開する過程で、次第に自らが「農民」であることを強調し始める。そして、農民こそチェコ語とチェコ文化の担い手であり、ネイションの核であるというロマン主義的農民観を援用しながら、チェコ・リベラル派のヘゲモニーに挑戦し、政治的影響力の拡大と政治的要求の実現を積極的に推し進めようとしたのである。従来このロマン主義的農民観は、チェコ・リベラル派が農村住民の啓蒙を進め、農村住民をネイションに統合する際に頻繁に引き合いに出された。しかし、農業運動の過程で、農村住民はチェコ・リベラル派が用いてきたレトリックを逆手にとって、農民こそチェコ・ネイションの真の担い手であると主張し、ネイションにおけるヘゲモニーを握ることを目指し始めたといえる。

こうして農村住民が政治的影響力の拡大を目指し、チェコ・リベラル派とヘゲモニー争いを展開する過程で、農村住民こそネイションの核であり、チェコ文化の担い手であると主張し始めたことは、農村住民とネイションの関係を変化させるとともに、農村の民俗文化が有す意味にも変化をもたらすことになったのである。

こうした変化を象徴すると考えられるのが、1895年にプラハで開催されたチェコスラヴ民俗学博覧会（*Národopisná výstava československá v Praze*）に対するチェコ・リベラル派の姿勢である。この民俗学博覧会は、民俗学の興隆、そしてボヘミアにおけるチェコ・ネイションとドイツ・ネイションの対立の先鋭化を背景に、ネイションの統一を促進し、チェコ人が自立した独自の文化を有し、ボヘミアの地と歴史的に結びついていたことを広く示す目的で、開催されることになった³¹。当時チェコ・リベラル派の中心勢力であった青年チェコ党は、当初は民俗学博覧会への支持を表明し、博覧会委員会に代表を送ったものの、最終的に博覧会への積極的支持からは距離を置くことになる³²。

民俗学博覧会は、ネイションの統一の促進を目標に掲げたが、準備の過程で露わになったのは、むしろネイション内部の分化の進展と諸社会集団間の競合・対立であった³³。そして、博覧会の展示でどの集団の民俗文化をネイションの文化として取り上

げるかは、そのままネイションにおけるヘゲモニー争いに直結する問題となり得た。従って手工業者など諸集団、とりわけ自らを「ネイションの核」と称する農村住民からそのヘゲモニーに対する挑戦を受けていた青年チェコ党は、博覧会の発案者シュールベルトらによって農民や手工業者の文化を博覧会の展示の基盤に据える方向性が打ち出されるなかで、博覧会を積極的に支持することができなくなっていったと考えられるのである³⁴。

このように農村住民は、要請される規範をただ受け入れ、受動的な存在としてネイションに「統合」されたわけではなかった。そして、農村の民俗文化は近代チェコ・ネイションの文化に重要な素材を提供したものの、チェコ・リベラル派と農村住民のヘゲモニー争いが展開されるようになるなかで、農村の民俗文化が有す意味も変化し、むしろネイション内部に緊張をもたらしことになったと考えられるのである³⁵。

まとめ

本稿では、ボヘミアにおけるネイションと農村住民との関係を、特に民俗文化に注目しつつ検討した。そこから明らかになったのは、民俗文化が近代ネイションの文化の構築にあたって重要な素材を提供し、ネイション形成に寄与しただけではなく、同時に緊張をももたらすものであったということである。

その緊張というのは、どの民俗文化をネイション化するか、という問題によってのみもたらされるわけではない。そもそもネイションと民俗文化との関係自体が、非常に緊張を孕んだものであったと考えられよう。というのも、本稿で論じたように、ネイションが重要な政治的・社会的争点になる19世紀のネイション観によれば、全てのネイションが政治的権利を貫徹できるわけではなく、文明性を備え、進歩に適したネイションのみがその権利を行使することが可能とされた。つまりネイションは、民俗文化を利用しつつ、自らが伝統的に独自・固有の文化を有してきたと主張するだけでは成立し得ず、文明性と進歩性を備えていることを示す必要があった。つまり近代の政治主体としてのネイションは、一方で独自性あるいは固有性、他方で文明性や進歩性といった普遍性を併せ持つ必要があったのであり、その点でネイションは常に矛盾と緊張をはらむことになったと考えられるのである。

このシンポジウムで報告された藤原氏が、ナチスが近代化を進める一方で、民俗文化を推奨するという相矛盾した課題と取り組むことになったことを指摘されているが³⁶、これはナチスのみならず、ネイションを基盤とする近現代の政治全般が直面することになった課題なのではないだろうか。本稿の初めで、ボヘミアのネイション研究が都市を中心に進められ、農村についてはほとんど研究が行われていないと指摘し

たが、こうした傾向は他地域のネーション研究、あるいは政治史研究についても恐らく指摘することが可能であろう。しかし、ネーションや政治をめぐる動きが都市を中心に展開されたからこそ、それが孕む矛盾や緊張は周縁の存在とされた農村においてより顕著となると考えられ、こうした問題を明らかにしてゆくことに農村史研究の意義があると思われるのである。

〈註〉

- 1 本稿では、*národ* の語を原則的に「ネーション」と訳す。但し *národní obrození* については、この概念自体が *národ* の原初論的理解に基づくことから、「民族再生」と訳すことにする。
- 2 M. Hroch, *Die Vorkämpfer der nationalen Bewegung bei den kleinen Völkern Europas* (Prag, 1968); idem, *Social Preconditions of National Revival in Europe* (Columbia UP, 2000, first published in 1985 by Cambridge UP).
- 3 近代ボヘミア史、およびネーション・ナショナリズムについての研究動向にかんしては、以下の研究を参照。桐生裕子『近代ボヘミア農村と市民社会：19世紀後半ハプスブルク帝国における社会変容と国民化』刀水書房、2012年、序章。
- 4 これまでの考察をまとめたものとして、桐生裕子『近代ボヘミア農村と市民社会』。本稿も、基本的にこの研究に依拠する。
- 5 例えば、E. J. ホプズボーム（浜林正夫他訳）『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店、2001年、133-135頁。
- 6 本稿では、民俗文化を、民衆が慣習的に保持してきた文化と理解して議論を進めることにする。
- 7 なおボヘミアの農村住民は、1848年革命期まで隷農制の下にあった。
- 8 F. Kutnar, *Obrozenské vlastenectví a nacionalismus*, Praha, 2003。以下、ネーション概念の変遷については、基本的にクトナルの議論に依拠する。
- 9 この時代の祖国の定義は論者によって揺らぎがあり、また直線的な発展がみられたわけではないが、基本的に狭義には自分の生地、広義にはボヘミア王国ととらえられていたと理解してよいだろう。
- 10 M. Hroch, *Na prahu národní existence*, Praha, 1999, pp. 23-24.
- 11 I. Heroldová, “Rozvoj školství a osvěty v Čechách v době národního obrození”, in: *Etnografie národního obrození*, Díl 5, Praha, 1978, pp. 42-45.
- 12 チェコ・リベラル派とそのネーション構想については、桐生裕子「19世紀中葉におけるチェコ・リベラル派の『国民』構想」『ヨーロッパ研究』第9号（2010年）、101-113頁。同『近代ボヘミア農村と市民社会』第2章。
- 13 19世紀の中央ヨーロッパでは、ドイツ国民国家の建設が大きな政治的争点となった。そして、

- 新たなドイツ国民国家の基盤として、ボヘミアを含むドイツ連邦が想定されたことから、チェコ・リベラル派の活動は、ハプスブルク君主国内の諸ネイションの動きみならず、ドイツ国民国家建設をめぐる動向を強く意識して進められることになった。
- 14 『ネイション新聞』は、革命期にチェコ・リベラル派のハヴリーチェク (K. Havlíček) が編集主幹を務めた新聞である。
 - 15 *Národní noviny* (以下、*NN*), 6. 4. 1848.
 - 16 *NN*, 14. 12. 1848.
 - 17 *NN*, 16. 11. 1848.
 - 18 *NN*, 14. 12. 1848.
 - 19 J. Petrář/ J. Havránek, “Rolnické hnutí v českých zemích v letech 1775-1918”, *Československý časopis historický*, 1969, pp. 864-866; J. Svoboda, *Protifeudální a sociální hnutí v Čechách na konci doby temna*, Praha, 1967, pp. 97-117.
 - 20 *NN*, 6. 4. 1848. 農村を中心に1848年革命について論じた研究としては、F. Roubík, “Na českém venkově roku 1848”, *Časopis pro dějiny venkova*, 1928, pp. 161-231; J. Kočí, “Příspěvek k rolnické otázce v Čechách v r. 1848”, *Československý časopis historický*, 1957, pp. 59-85, 248-266; 篠原琢「1848年革命とボヘミアの農村住民」『史学雑誌』100-10 (1991年)、1-40頁。
 - 21 *NN*, 6. 4. 1848. チェコ・リベラル派の議論においては、市民は知的にも経済的にも自立していることが求められたため、農村住民の政治教育のみならず、農業専門教育の重要性も強調された。
 - 22 なおハプスブルク君主国権力も、農村住民の教育の必要性を認識していたことから、君主国権力とチェコ・リベラル派は時に協調し、時に競合しながら農村における啓蒙活動を進めることになった。
 - 23 19世紀後半のボヘミア農村における出版活動と結社活動については、桐生裕子『近代ボヘミア農村と市民社会』第3章から第5章。
 - 24 森村敏己「『集う』ことの意味」森村敏己・山根徹也編『集いのかたち』柏書房、2004年、20-25頁。
 - 25 *Zpráva o činnosti Českého odboru rady zemědělské pro království České*, 1911, p. 364; *Bericht über die Thätigkeit der Deutschen Section des Landesculturrathes für das Königreich Böhmen im Jahre 1911*, p. 289.
 - 26 F. Roubík, *Časopisectvo v Čechách v letech 1848-1862*, Praha, 1930; idem, *Bibliografie časopisectva v Čechách z let 1863-1895*, Praha, 1936.
 - 27 J. Volf, *Z pamětí starého českého sedláka*, Hradec Králové, 1932, p. 33.
 - 28 I. Heroldová, “Rozvoj školství a osvěty v Čechách”, p. 10.
 - 29 ボヘミアの農業は、1860年代後半以降、飛躍的な発展を遂げた。特に肥沃な中央ボヘミアから東ボヘミアにかけての地域では、製糖業と結びついたテンサイ栽培が急速に広まった。し

- かし、1873年に大不況が生じると、その影響はテンサイなどの価格低下を中心に農業に及んだ。テンサイの価格は1877年以降再び上昇しはじめるが、大不況以前の水準には戻らず、また大不況の影響が小さかった穀物価格も1879年以降下降をはじめ。さらに製糖業の不況によって1884年以降テンサイ価格が急落し、ボヘミアの農業全体が不況に陥った。J. Křížek, “Krise cukrovarnictví v českých zemích v osmdesátých letech minulého století a její význam pro vzrůst rolnického hnutí”, *Československý časopis historický*, IV(1956), pp. 270-298; V(1957), pp. 417-447, 473-506; VI(1958), pp. 46-59.
- 30 農民はチェコ・リベラル派の重要な支持基盤であったものの、1880年代に至るまで農民が立法機関の議員に占める割合は低く、議員の中核を成したのも教養市民であった。桐生裕子『近代ボヘミア農村と市民社会』313頁。
- 31 民俗学博覧会は、ネイション劇場 (Národní divadlo) の監督 (ředitel) であったシューベルト (F. A. Šubert) の提案によって、開催されることになった。民俗学博覧会について詳しくは、*Národopisná výstava československá v Praze 1895*, Praha, 1895; S. Brouček, *České národopisné hnutí na konci 19. století*, Praha, 1979; S. Brouček(ed.), *Mýtus českého národa, aneb, Národopisná výstava československá 1895*, Praha, 1996。またチェコ・ネイションとドイツ・ネイションの関係については、J. Křen, *Die Konfliktgemeinschaft. Tschechen und Deutsche 1780-1918*, München, 2. Auflage / Studienausgabe, 2000。
- 32 S. Brouček, *České národopisné hnutí*, pp. 7, 70, 104-105。
- 33 この時代、農村住民のみならず手工業者をはじめとする諸集団が、「ネイションの代表」を標榜してきたチェコ・リベラル派の政治運営に対する批判を強めていた。
- 34 S. Brouček, *České národopisné hnutí*, pp. 105-106。
- 35 なお農業運動の指導者となったのは、結社活動に積極的に関与し、積極的に農法の改善を進めた農民たちであり、彼らの民俗文化に対する姿勢も両義的であったことを指摘しておくたい。
- 36 藤原辰史「麦おばさんはどこへ行ったのか—村の収穫祭とナチズム」『ゲシヒテ』第2号(2009年)、41-60頁。